☆年間第27主日（10月2日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（ハバククの預言 1 章 2-3 節, 2 章 2-4 節）

主よ、わたしが助けを求めて叫んでいるのに
いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。
わたしが、あなたに「不法」と訴えているのにあなたは助けてくださらない。
どうして、あなたはわたしに災いを見させ
労苦に目を留めさせられるのか。
暴虐と不法がわたしの前にあり
争いが起こり、いさかいが持ち上がっている。
主はわたしに答えて、言われた。
「幻を書き記せ。
走りながらでも読めるように板の上にはっきりと記せ。
定められた時のためにもうひとつの幻があるからだ。
それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。
たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。
見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。
しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙Ⅱ　1章 6-8, 13-14 節）

愛する者よ、そういうわけで、わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません。むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。

福音朗読（ルカ 17 章 5-10 節）

使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。

あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

十月二日は足立教会の守護聖人、守護の天使の祝日でもあります。私たちに寄り添い私たちを神の国に至るまで休みなく助けてくださる守護の天使を思い起こし、祈りましょう。現代には人々と生活しながら孤独を感じ、苦しんでいる人達がいます。もしかしたら私自身もそうかもしれません。このような私たちのために神さまは一人一人に守護の天使を送り守らせておられます。私たちは決して孤独ではないのです。

さて十月はロザリオの月と呼ばれています。ロザリオは一つ一つの祈りがバラの花として薫り高くマリア様を通して父なる神様に捧げられる祈りです。ロザリオの珠一つ一つが祈りなのです。単なる飾りではありません。家族で、グループでロザリオの祈りを捧げる習慣を育てましょう。足立教会では日曜日 9 時のミサの前に、そして子供たちはミサの後玄関のマリア像の前で一緒にロザリオを唱えます。ぜひご参加ください。

第一朗読　（ハバククの預言 1 章 2-3 節, 2 章 2-4 節）

今日読まれるハバククの預言では神に助けを祈り叫ぶイスラエルの民が、神の返事がない、または遅いと感じて訴える様子が読まれます。この祈りは現代の私たちにも当てはまるのではないでしょうか。悲惨な侵略戦争、抑圧、脅し、迫害、ありとあらゆる不正が横行している今日神はなぜ黙っておられるのかとの叫びは日に日に強まっているかのようです。それに対し預言の後半では、主の言葉がはっきりと読めるように書き記せとの言葉が語られています。すなわち、主の言葉の実現は人を欺くことなく、遅れることなく遅くなっても実現するとの力強い言葉が語られています。私たちは一刻も早くと焦っていますが、主の裁きの時は必ず来るとの信仰によって強くいることが大事だと預言書は語っています。

第二朗読（使徒パウロのテモテへの手紙 II　1章 6-8, 13-14 節）

イエス・キリストを救い主として信じることを恥じてはならないとテモテに勧めています。今でこそイエスを私たちの主として拝むことはなにも大変なことはありませんが、パウロたちが生きていた時代にイエスを主と宣言することは大変勇気のいることであったに違いありません。そのような時代に書かれた手紙です。「福音のために私とともに苦しみをしのんでください」と。日本の教会は表面的には信仰の自由がありますが、その信仰の大切さを案外真剣に考えていないのではないでしょうか。信仰の自由は自然に与えられるものではなくある意味勝ち取るものなのです。今の私たちにそのような勇気があるのでしょうか。私たちを神から引き離す多くの誘惑にさらされ、信仰が弱くなっているのではないでしょうか。

福音朗読（ルカ 17 章 5-10 節）

使徒たちがイエスに「信仰を増してください」と願っています。信仰は成長していくものなのですね。小さい頃とか、洗礼を受けたころから私たちの

信仰はどのように増しているでしょうか。何もしないでいては信仰は弱っていき、少なくなっていきます。何が必要なのでしょうか。それは第一朗読にある預言の言葉、神の言葉への信頼でしょう。「待っておれ、それは必ず来る」。世の中の動きに、人々の言葉に右往左往しないことです。またパウロが弟子のテモテに送った手紙にある「神は、臆病の霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊を私たちに下さった」のですから、恥じることなく主を証しすることによって私たちの信仰は成長し、増して行くのではないでしょうか。

アヴェ・マリアの祈り　（ドンボスコ社）

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光